

---

# 食堂 4

沢山書世

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食堂4

### 【Nコード】

N2998Q

### 【作者名】

沢山書世

### 【あらすじ】

食堂の人の良い店主と、僕の気づかい合戦。嫌いな食材を出されたが、店主を前にして、それを正直に言えない僕。この場を乗り切ろうといういろいろな手段を考えだして試みるのだが……。身に覚えのある方、試してみてはいかがでしょうか。

## （前書き）

共感していただけるとうれしいです。

躑の厳しい環境で育った。幼いころから、言葉遣いや姿勢については、何度も注意されていた記憶がある。きつとこの家庭でも同様の躑をしているのであろうと思い、我慢して言うことを聞いているうちに、それらはやがて身に沁みついていったようだ。現在、人前で恥をかかないで済んでいることは、躑の効果によるところが多々あると感じており、ありがたいことだと概ね感謝をしている。ただ、子供のことである、自分のためになるとはつきりと自覚していたわけではないまま、自然体を操作する作業であるから、苦痛に感じることもしばあった。最もしんどかったのは、食事の躑であった。ついていないことに、僕の場合、嫌いなものの種類が豊富であった。ピーマン、ニンジン、しいたけ、子供が嫌いそうなものはひととおり嫌いであった。食わずに残すとしかられた。だが僕にとつては、しかられたからといって、はい言うことをききますと、すんなり受け入れられる問題ではなかった。

「栄養があるんだから残さずに食べなさい」と言われると、

「いやだよ、代わりに納豆と御飯をたくさん食べるから、それで許してよ」

と懇願した。

「なんでも食べないとダメよ」

としかられては、

「いろんな種類のお菓子を食べるから、いいでしょ？」

などと自分なりに代替え案を提示して、交渉していたことを、うつすらと覚えている。

しかし結局は、

「そんなことをしていると、いつまでたっても大きくなれないよ」

と子供にとっては痛い決め台詞を食らわされる。それに対して僕

は、

「それでもいいもん」

と口答える時期もあったようだが、繰り返し同じことを言われているうちに僕の気持ちは変わっていった。

「何度も言われるということは、心配されているということ。大きくなれないのは、どうやら、あとあと困ることのようだ」

と思うようになっていったのであろう、いつしか自分なりに好き嫌いをなくす努力をしてみた。嫌いなものを好きなものと一緒に口の中に入れて、自分の舌をごまかそうとしてみたり、目をつぶってあたかも気付かなかったふりをして、自分をだましながら食べてみたりした。努力の甲斐があつてか、やがてひとつひとつと、苦手を克服していった。最後まで克服できずに残ったのが、ゴボウであった。これはいまだに残っている。

「まいったなー。なんで、野菜炒めによりによってゴボウが入っているんだろう。」

野菜炒めはいままで幾度も食べてきた。普通はキャベツ、ニンジン、ニラ、もやしが入っている。もちろんそれ以外の野菜を入れていても、使用する食材を選ぶことはお店の自由であらう。だが、ゴボウが入っていたためしは今までなかった。もちろん野菜の仲間には違いないが、果たして野菜炒めに使用することは許されてよいものであるうか。

ゴボウが好きな人や、嫌ってはいない人であれば、野菜炒めの中でゴボウの存在に気付いたとしても、

「へー、変わっているじゃん。ひよいパクッ」

と、ちよつと立ち止まりはしても、何事もなかったように進んでいくことであらう。だが、僕にとっては天敵の思わぬ出現である。通り道に予想をしていなかった障害物をいきなり置かれたようなものだ。僕は道を閉ざされて困惑した。

「まさかここであなたにお会いするとは。思いもありませんでした」

と言った心境であつた。

「お客さん、飯とにらめっこですか？」

いつの間にか僕の前に来ていた店主の声で、僕は、はっと我に返つた。

「あつ、そんなふうに見えましたか、ははは」

「ええ、じつと見つめていましたからね。で、にらめっこは勝ちましたか？負けましたか？」

「すみません、実は試合はまだ終わっていないんですよ。これからなんです」

「ははは。お客さん、うまい事を言うねー。それはそうとせっかくの料理が冷めちゃいますから、どうぞ早く召し上がってください」

「すみません、いただきます」

僕の返事を聞いた店主は、厨房に戻っていった。

いただきますと言つてはみたものの、相手は今まで三十年以上負かされ続けていた手練れだ。店主に一言せかされただけで戦いを挑む気がわきあがる相手ではない。

「いいや、ゴボウは食わずに残してしまえ」

僕は、戦わずに相手に勝ちを譲ろう、と方針を決めて食事に取り掛かった。ゴボウは箸を使って皿の隅によけてしまい、それ以外のものを口に運んだ。ところが、ゴボウを口には入れないように努力してはいても、常に目にはゴボウが映っているし、鼻からは風味が入ってきてしまう。けっしておいしいとは言えない食事になつてしまった。

また店主が厨房から出てきて、負け戦をしている僕に声をかけてきた。

「お客さん、うちの野菜いため、どうですか？」

客に感想を聞いてくるということ自体、自信がなければできないことであろつ。当然、返事には褒め言葉を期待しているはずだ。

「珍しいものが入ってますね」

僕は味のことには触れず、その代わりに気づいたことを伝えた。嫌いなものが入っているのであるから、うまいとは言えない。言えは嘘になってしまふ。かといってまずいとストレートに返事することはできず、カーブで返したのである。

「わかりましたか」

「ええ、すぐに気が付きました」

こっちの身の安全がかかっているんだ、天敵を見過ごすわけはないだろうが、と思った。

「うちでは、隠し味にゴボウを入れているんですよ。」

「そのようですね」

と返した。隠し味なら、見えないように工夫してくれよと思ったが、言えない。

「出汁がよく出ていいんだ、これが。うちの自慢の一品です」

「そうなんですか」

と返す。余計なことをしてくれてますねと、本当は言いたかった。店主が皿を眺めて、

「あれ？ お客さん、ひよっとしてゴボウをよけて食べていませんか？」

と問いかけてきた。ドキッ、見られたくないものを見られてしまった。

「どうしよう」

店主が僕の返事を待っている。僕はとっさに、

「僕は楽しみをあとに残すタイプなんです」

と答えた。自信満々にしている相手を傷つけることは避けたいと思ひ、今回はうそつきになることを僕は選んだ。

「そうでしたかー、安心しました」

店主がホッとした表情で言った。安心してもらえて、僕もホッとした。

「ひよっとしたら、うちの自慢の一品に入れているゴボウを、お客

さんが嫌っているんじゃないかと思ってしまいましたよ」

「まさかー」

「そうですね、子供じゃあるまいしねー」

もう、これ以上の嘘はつきたくない、お願いだから早く厨房に戻ってくれと思ったが、他の客が店に入ってきて来ないので、店主は持ちぶさたなのであろう、なかなかフロアから立ち去らない。そう、客は僕一人なのである

「電話でもかかってきてくれないかなー」

「早く他のお客さんが入ってきてくれないかなー」

僕は初詣の時以上に強くお願いした。

「あの時は、宝くじが当たりますようにとお願いしましたが、あれは取り下げます」

「後日お賽銭を奮発しますから、どうか今の僕を助けてください」

店主は話好きの人なのであろう、初対面の僕にあれやこれやと話しかけてきた。しばらくは箸を止めて話を聞いていたのだが、いつまでもこのままの姿勢を続けているわけにもいかない。じっとしていても野菜炒めは減ってはくれないのである。何とかこの状況を打開しなければと僕は考えた。

作戦を練るにあたっての僕に与えられている状況は厳しかった。目の前で、悪意のない張本人が見つめているのである。せっかく、第一案で無理なものは無理だと、ゴボウを残すことを決めたのに、それはできなくなってしまった。そんなことをすれば彼をがっかりさせることになってしまう。

「仕方ない、この作戦で行こう」

僕は閃きというよりも、単なる思い付きで出てきた第二案に賭けてみることにした。

僕は皿の端によけたごぼうの束を箸でつまむと口に入れた。食べたのではなく、あくまで口に入れただけであるから、噛みはしない。

うっかり噛んで味がしみだしてしまわないように、注意を払いながらゴボウをほお袋に貯めていった。

「ゴボウはシャキシヤキして、歯ごたえもいいんですよ」

店主が余計な事を言ってきた。彼に悪気はないのだが、僕にとっては嫌がらせに聞こえる。第二案は出だしていきなりのピンチを迎えた。店主からこんな発言が出ることは、予想していなかった。こうなれば行き当たりばったりで、これからの展開をしのいでいくしかない。

「そうですね」

と僕が答える。口の中がゴボウで一杯なのに、不思議と器用にしゃべれた。腹話術みたいなものであろう。

店主からシャキシヤキ音を要求された僕は、慌ててほお袋から歯の下にゴボウを移動させて噛みだした。

シャキシヤキという音が僕の口から響き、店主はご満悦だ。

「これよ、この音。たまらないねー」

まるでクラシック音楽を聞くように、店主はしみじみと音に聞き入っている。対する僕はというと、心の中でいろいろな楽器の乱れ打ちをされているといったところであろうか。噛んだゴボウから味が染みだし、僕の味覚を刺激し始めていたのである。これは我慢できない。パニックである。

「ちょっとトイレに行きたいんですが」

「ああ、どうぞ使ってください。奥にあるあのドアです」

店主が指を指してトイレの場所を教えてくれた。

「ちよっとお借りします」

僕は急いでトイレに行くと、口の中のものを吐き出した。噛んではみたが、飲み込むことまではできなかったのである。僕は証拠を流してから、洗面台に移動し口をすすいだ。

「やれやれ、人心地着いた」

トイレを出て席に戻ると、テーブルの上に小鉢が置いてあることに僕は気づいた。先ほどまではなかったものである。

「これは？」

と店主に尋ねると、

「うちの自慢のゴボウサラダです。」

と店主が答えた。

「ゴボウ・・・ですか」

「お客さんがゴボウを気に入ってくれたようなので、これは私からのサービスですよ。御代は結構ですから、遠慮なく召し上がってください」

「ええっ？」

どこをどう勘違いすれば、僕がゴボウ好きに見えるのであろうか。「これまでの様子から察すれば、普通か、それ以下に映るんじゃないかな。こちらが言わないまでも、見ていれば解りそうなものだろう。」

と僕は思った。うろたえて動揺を隠せない僕を見て、店主はなおも鈍感な受け取り方をした。

「お客さん、ひょっとして、お腹がいつぱいなんですか？」

店主が不安げに尋ねた。

「いえ、まだ大丈夫です」

胃は空っぽに近い状態だ。僕はつい本当のことを言ってしまった。「なら、よかった。おかわりもありますから、たっぷり食べてください」

店主はホッとした様子でさらにゴボウを勧める。そんな店主を見てしまうと、

「サービスでわざわざ出してくれたのだ。これは残すわけにはいいかない」

「相手の思いやりにこたえなければ男がすたってしまう」

といった気持になる。

店主が、僕の前の椅子に腰掛けると同時に思い出話を始めた。

「私がちいさいころはね、出されたものを残すと親に怒られたものです」

「僕もそうでした」

「農家の人たちが汗水たらして作ってくれた、ありがたいもの。感謝して全部食べなさいって言われてね」

「そう、ありがたいものなんですよね」

「以来、満腹でも残さず食べるようになりました」

店主はしみじみと語ってくれたのであるが、僕としては今は聞きたくはない話であった。なにしろ好き嫌いのことは全く考慮されていない話なのであるから、一方的な言い分に聞こえてしまう。

しかしこれがいい話であることには違いない、

「これはますます残しにくくなってしまった」

と僕は思った。気が進まないまま、箸でゴボウサラダをつまんで、それをギツと見つめた。

「おや、表情が陰しくなりましたね、本当は限界なのでは？ おなか一杯なんじゃないですか？」

「いえ、まだまだ」

安心してもらうために笑顔を作ったつもりであったが、無理をしているので彼には僕の表情が苦しそうに見えたらしい。

「お腹がいっぱいでもないのにそんなに苦しい表情をするとは、うちの料理で食あたりでも起こしたのかな、大変だ」

「いや、決してそんなことでは」

「そういえば、さっきトイレに行ったものね。下痢ですか？」

「下痢はしていません」

と答えるが、店主の追及は止まらない。

「ひよっとして、ゲロはいちゃったのでは？」

「それは・・・」

ゴボウを口から吐き出しはしたが、はたしてこれがゲロの部類に

入るのかどうか解らず、僕は口ごもってしまった。

「吐いたのなら食中毒だよ。救急車と保健所を呼ばなきゃ。お客さん、どうなんだい？」

店主が問い詰めてくる。僕は今日何回目かの窮地に立たされた。

そこに電話の音が鳴った。厨房の奥から聞こえてくる。

「やった、さっきのお願いが通じた、ありがとうございます」

店主が電話にでてくれれば、ピンチの一時しのぎができる。僕は心の中で、お礼を言った。

ところが世の中こちらの思うようには運ばないものだ。店主は、「いまは大事な話をしているところなんだ。こんな時に、電話なんかにてていられるかよ」

と叫んでそこを動かうとはしない。電話にでる気はないようだ。僕は焦った。せつかくいたっていたチャンス逃したくはない。

「見てください、僕は元気です」

僕はガッツポーズを作って店主に見せた。

「俺に心配をかけまいと、無理しているんだろ」

「無理はしていません。お願いですから、電話に出てください」

「うちの店に迷惑をかけまいと、俺が電話にでている間に帰っちゃうつもりだろ」

「帰りません」

「嘘言え」

「本当です。だいいち、代金をまだ払っていませんから、帰るに帰れません」

「ああ、そうか。食い逃げになっちまうな」

「ええ。それに、この電話を終わらさないことには、救急車も保健所も呼べませんよ」

「あつ、それもそうだ。電話を使わなきゃ、どっちも呼べないね」

「解っていただけましたか？」

「うん、解ったよ。俺、電話にでるよ」

店主が電話を取りに厨房の中に行ってくれた。  
「チャンスだ」

僕は皿に残っていた野菜炒めと、ゴボウサラダを、上着の内ポケットに急いで流し込んだ。

「やれやれ、片づいたぞ。これでゴボウは消えた」

「電話中に食べきったことにすればいい。それで食中毒の疑いも同時に消える」

僕は一度に二つの懸念が解決され、人心地着いた。

奥から電話で話す店主の声が聞こえてくる。

「えっ、本当ですか？」

「テレビの、はあ」

「料理特集で、はあ」

「うちの店が、はあ」

「ゴボウ料理部門の、はあ」

「えっ、ただだ第一位に選ばれたんですか」

「で？ はあ、・・・はあ、・・・わかりました！。ありがとうございます！」

ガチャッ

電話を終えた店主が、笑顔でフロアに戻ってきた。

「お客さん、やったよ」

食中毒のことは忘れていたようだ。

「どんな電話だったんです？」

「うちの店が、うちのゴボウ料理が、テレビ番組で表彰されるんだってさ」

「うわー、それはよかったですね」

「お客さん、あんたも喜んでくれるかい」

「もちろんですとも。今の電話にはすごく感謝しているんです。喜ばずにはいられませんよ」

「そうかい、ありがとう」

ポケットがビチョビチョに濡れているのであるから、いつまでも喜びあつてはいられない。とつとこの場を離れたい僕は、話題を一気に変えた。

「じゃあ、僕はこれで失礼します。おいくらですか？」

「めでたいんだから、そんなものはいらないよー」

「そうはいきませんよ。食・べ・た・も・の・に対する代金は払わせてください」

僕は、きれいになつた食器を指さしながら、胸をはって店主にそう言った。

「おや、お客さん、きれいに食べてくれたんだね」

「もちろんですとも」

「よかった、食中毒じゃなかったんだね」

店主は先ほどのことを思い出したようだ。

「あたりまえですよ」

「で、味はどうだったね？」

「完食したんですよ。おいしかったに決まっていますでしょう」

「そうかー、うれしいよ」

「自信を持つてください」

「うん、さっきは食中毒を疑ったりして迷惑をかけたね」

「疑られるような様子だった僕の方こそ申し訳ありませんでした」

「水に流してくれるかね？」

「ええ。それにしても、テレビで表彰されるなんてよかったですねー」

「ああ、そうそう。テレビ局の人たちがこれからカメラと賞状を持ってこの店にくるんだって」

「そうですね、忙しくなりますね。邪魔してはなんですので、僕はこれで失礼します」

「ちよっとお客さん、まだいてくださいよ」

「えっ？」

「私一人でテレビに出るのは、なんだか恥ずかしくて」

「テレビ局は僕に用があつてくるわけじゃないでしょう」

「それはそうだけど、なんだか心細くつて。お客さんが常連の代表ということにしてさ、いてくださいよ」

「それはちよつと」

一人でテレビに出ることが心細いであろうことは、想像はつく。

僕に不都合がなければ、これも何かの縁と、協力してあげたいところだ。しかし、今の僕は、不都合だらけだ。ゴボウが嫌いな僕がこの店の常連を装うことは、店主に対しての背信行為で、後ろめたさを感じる。それに、そもそものが、今日初めて入ったお店なのである。常連を名乗るのはおこがましい話だ。そしてなによりも重要なのは僕の置かれた状況である。じきにポケットの中から出てきた汁で服にシミが現れるであろう。そんな姿でテレビカメラの前に立ちたくはない。全国放送されては末代までの恥である。僕は、丁重にお断りすることにした。店主に僕の失礼する意志を伝えようとしたその時である、

ガラッ

店のドアがあいた。すぐさま大勢の人がドヤドヤと店の中に入ってきた。カメラを抱えた人や、マイクを持った人がこちらに向かってくる。店主と僕は店の奥へと押しやられて、囲まれてしまった。テレビ局の実に迅速な到着であつた。先ほどの、僕の二つ目の願いがかなえられた瞬間であつた。

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2998q/>

---

食堂 4

2011年2月12日19時35分発行